

# 読売歌壇

## 小池 光選

毛が一本耳の穴から伸びてきてやがてジャックの豆の木となる 東京都 福島 隆史

【評】耳の穴から毛が伸びる。これも一種の老化で、若者にはない現象。わが耳毛よ、どんと伸びてジャックの豆の木のようになれ。想像力が生き生きして楽しい歌。

猫が夢見て悲しい声で鳴く時はそばにゐる我も悲しくなりぬ いわき市 佐川 義成

【評】猫がはたして夢をみるのか、猫に聞いてみないと分からないが、しかし作者の気持ちがよく分かる。眠りから覚めて小さな声で鳴く。悲しい生き物なのだ、猫は。

年金は偶数月に大相撲は奇数月にあり老いのひととせ 座間市 高田 孝子

【評】言われてみてはじめて気がついた。たしかに年金支給は偶数月、相撲は奇数月。そしてたちまち時は過ぎてゆく。

歌を書き汗にまみれた鉛筆をナイフで削れば木の香りする 東久留米市 郷間 浩明

目の前を回転寿司が歩いてゆく狩することく捕らえて食えり 高崎市 長友 聖次

受け皿にこぼれし酒も飲み干してさあ帰宅せむ猫待ちありぬ 鹿嶋市 加津牟根夫

緊急に入院させられ三日たつ 生きてをりたりうたつくるべし 仙台市 加藤 祐子

ひもじさのあまり入里におりてきし熊は撃たれてびくりともせず 山口県 末広 正己

亡き父にどこか似ている笠智衆 小津の映画は我が胸にあり 所沢市 鈴木 照興

柿の木に登るのは我 落とす実を受け取る役は兄さんだった 調布市 川久保洋子

## 栗木 京子選

故郷を捨て汽車に乗り涙した私と重ね「サライ」は残る 水戸市 滝田 京子

【評】「サライ」や「扉」などの名曲を残して十月に亡くなった谷村新司氏。「サライ」を口ずさみながら故郷を離れた人は多いことだろう。「残る」という言葉に励まされる。トップにはガザの惨状その次に柿がうまいと報ずる国か 白井市 野老 功

【評】この「国」は日本。パレスチナ自治区ガザでは悲惨な戦況が続くがニュース番組では次々に話題が変わる。そこに違和感を覚えることが大切なのだと思える一首。

断食の祈りをせんと決めたるに特売チラシじつと見ておのり 米沢市 渡部絵里子

【評】戦地で苦しむ人のために祈ろうとする作者。その一方で、自身の日々の生活も大切なことである。下旬の率直さが印象深い。

沸騰の海手なすける神いずこトの傲慢猛省せよと 習志野市 郷 知念里

人よりもはるかに海を知つてゐる鱈の開きに手を合はせ食む 横浜市 杉山 太郎

一類り葱の高値を嘆き終へ紫蘇の実レシピを教はり戻る 奈良県 藤本 京子

我が友がピアノを奏でるマーラーの「巨人」に聴き入る金婚式の夜 東京都 青山 繁

数独に頭を悩ます小半日だれもがうねる生産性ゼロ 掛川市 村松 建彦

久々に二階に上がり知る秋やむくげ高きに百の花付く 村上市 岸 とし

二十年療養中の吾が娘ゲーキ許され誕生祝い 鶴ヶ島市 由井 意男

## 俵 万智選

大人たちの低い視界にとどくまでこの初雪はほくたちのもの 豊中市 葉村 直

【評】物理的には大人のほうが視点は高いけれど、子どもの視線は空を自由に飛び回る。まさならな心と目で見る初雪の美しさ。下の句、万能感が伝わってきて素晴らしい。

あのひと、と開かれてはいるひらがなの記憶を僕が知ることはない 東京都 吉田 懐

【評】耳で聞くぶんには同じなのに「ひと」と聞かせるのさう。「あのひと」よりも「あのひと」は、とても主観的な感じがする。自分と出会う前の歴史に、関わりようがない寂しさ。みんなって聞かせるたびに身構えるその中にほくは入ってますか 埼玉県 玖嶋さくら

【評】日常的な言葉でも、受け取る人によって、身構えてしまうことがある。当事者の声としての表現が、切実さと陰影を伝えてくれる。

ゆるやかな約束をしてやわらかな後悔をして夏を見送る 東京都 立川 亮

昨日までゾンビの面を着けていたマネキンはサントラ唱でほほえむ 東京都 音羽 凜

人生に勝ち負けなどは無い事を孫に教えて人生ゲーム 筑紫野市 二宮 正博

僕という辞書の編纂作業ではきみの名前を消す夜がある 沖縄県 下地 颯

ペンネームみたいと思つ本名と本名らしく思つ筆名 堺市 一條 智美

くつ下の裏を表に変えながらふんわりたたむ小春日の午後 つくば市 岩瀬 悦子

少しづつ私が秋になっていく美容院の鏡の中で 船橋市 田中 澄子

## 黒瀬 珂瀾選

工場の夜勤に変えたあたりから影を盗られて調子がでない さいみ野市 雨雨雨汰

【評】「影を盗られて」は日中に陽を浴びない生活になった、の意でしょう。労働の様々なあり方と困難を描く一首です。シャミツの小説「影をなくした男」を想起しました。ラジオから突如父の名零れたり色気ある句と選者が評す 小野市 大野多恵子

【評】びくりしますよね。恐らく普段は堅物の御父上なのでしょう。意外にも「色気」に寄せる心があったのかと、父の思わぬ一面を俳句を通して知った、驚きの一瞬です。

軒下の足長蜂の巣の除去の攻防まさに千早城攻め 前橋市 平林 始

【評】蜂の巣の駆除の景から一気に「太平記」の世界に話が転じる面白さ。史実では千早城は陥落しなかったが、この巢はいかに？

指落とす事故に始まるなれそめは友や孫にも受ける秘話なり 川崎市 福本よしき

「あと何人死ぬかは停戦なるのかな」孫の呟きは胸振りたり 松江市 加賀 昭人

生憎の時雨に合羽着せられて子ども神輿は軽トラに来る 南丹市 中川 文和

初しぐれななめに叩く畦道を一人つりの登校班行く 浜松市 久野 茂樹

今もおお君のアドレス消せぬまま二度目の冬の入口に佇つ 滑川市 神田 法子

身めぐりを片づけ始めた母が「髪も染めるのやめたんよ」と言ふ 広島市 熊谷 純

僕の耳に僅かに残る君の声一個のラピスラズリのような 大網白里市 滝沢ゆき子

次回は12日(火)掲載予定  
◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。  
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌(俳)壇、  
○○先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから。右の影絵はほうねんかい